



新世紀のキャンパス

Campus of New Century

大正大学 3号館

エントランスホールを抜けた先には、地域に開かれた新しいアプローチが開設される予定だ。



2012年度グッドデザイン賞を受賞した3号館の外観。モダンかつ仏教系大学らしい品格が評価された。

黒漆喰磨きの壁が美しく映えるラウンジ。



研究室に隣接しながら、本に囲まれた空間でゼミや大学院の授業を行う閲覧室。写真は歴史学科のフロア。

大正大学では、2009年に策定した中期マスタープランに基づき、キャンパス整備計画を進めている。都心の校地を有効活用しながら、教育・研究棟として、2010年に7号館、2012年に3号館を新たに竣工。2014年までに、5号館、11号館が相次ぎ完成する予定だ。

同大学ではかつて、私大バブル期の約6分の1まで志願者数が落ち込んだ時代があった。大学の根幹を揺るがす定員割れに至る前に、新体制のもと緊急特別対策室が設置され、初の中期マスタープランが策定された。大きな柱は、「教学改革」と「キャンパス整備計画」だ。「大学の原点である教育に立ち返り、教学改革を実行した」と語るのは、上田忠憲教学支援部長だ。キャンパス整備では、この教学改革を実現するための大規模な施設整備を進めているという。

コンセプトは“キャンパス全体が

ラーニングコモンズ”である。今ではラーニングコモンズを図書館内に設置する大学も増えたが、同大学ではあらゆる自律的学習スペースと捉えている。もともと伝統的に、教員のいる研究室と学生が学ぶ場所（閲覧室）が、常に隣接してきたという特色を持ち、この学びの場の混在を、キャンパス全体に拡げようというのが狙いだ。まずは7号館の2Fに専用施設を設け、その実証結果から、3号館では各学科・コース別閲覧室にも導入した。よく閲覧室と聞くと、図書館の自習スペースが思い浮かぶが、同大学の閲覧室は、研究室に接したアカデミックなグループワークの場なのだ。

3号館は地下1F、地上5F建てで、1Fはエントランス、2～5Fは学科のフロアとし、3Fに表現学部表現文化学科、4Fに文学部歴史学科、5Fに仏教学部仏教学科のフロアがある。ワンフロアに、1学科の研究室と閲

覧室とゼミ室をミックスした配置だ。なかでもクリエイティブな作業を行う機会が多い表現文化学科は、他の学科とはコンセプトを変え、フロア全体を広い教室にし、複層ガラスで研究室や小教室を区切るというユニークな設計となっている。

教学改革との相乗効果で、2009年以降に改組、設置した中では、臨床心理学科、人文学科、歴史学科の志願倍率が約8～10倍と好調だ。

順風満帆に見えるが課題もあるようだ。古い歴史を持つ福祉や臨床心理の分野では、専門性を前面に出したコース制を採用しているため、国家資格合格率や研究実績に物足りなさも感じているという。専門分野ほど、高校生は教員や資格合格率を徹底的に調べてくるので、教育への努力は不可欠だ。さらなる教育内容の充実をはかろうと、同大学の挑戦は続く。

(取材・文／本誌 能地泰代)



ラウンジのようなこのオープンな空間が表現文化学科の教室。教室の概念を覆す自由な空間が創作意欲を刺激する。



2～3Fの吹き抜け構造の階段教室。ガラス越しのスケルトン効果で、“見える教育”を実践。



3号館のプロトタイプとも呼べる7号館のラーニングコモンズ。専任のコンシェルジュが常駐し、ワークショップ型授業やオープンレファレンスなどに活用されている。



プロユース仕様のデジタル設備を整えた副調整室。スタジオやアナウンス室も完備。